

三毒五惡段「第一惡」の一考察

佐々木 大 悟

一 問題の所在

仏教では一般に、何かの行いをするとき必ずそれが自分の身にかえってくるという自業自得の原理が説かれる。善い行いをすれば楽果が得られ、悪い行いをすれば苦果を得（善因楽果、惡因苦果）、またその業は三世にわたって影響すると説かれる。『大阿彌陀經』や『無量壽經』の中で説かれる業についても、それ以前に仏教で説かれていたものを正確に伝承していたかどうかは慎重になる必要があるが、とりあえずは、業の思想がくり返し説かれている。

三毒五惡段では、その業のなかでも、様々な惡の行為とそれによる現世での結果（殃咎）そして来世での結果（殃咎）が説かれる。ところが、ここで様々に説かれる「来世での果報」のうち、以下に示す『無量壽經』「第一惡」の「来世での果報」について問題を感じた。⁽²⁾ それは以下の箇所である。

轉質其身、改形易道。所受壽命或長或短。魂神精識自然趣之。當獨值向、相從共生、更相報復、無有止已、殃惡未盡、不得相離、展轉其中、無有出期、難得解脫、痛不可言。⁽³⁾

この傍線部について、注釈が開始されてから、現在の現代語訳にいたるまで、ほぼすべて「互いに来世でも報復しあう」という意味で解釈を行っている。ただし、江戸時代の西山派の学者炬範は講録『無量寿経略箋』において、唯一人ここに二つの解釈の可能性を示している。ここでは「来世で互いに報復しあう」という通説の解釈を第二義に持っていて、第一義としては「惡業が次の世までついでくる（報いてくる）」という解釈を出している。この説は其の後は継承されず、近年の現代語訳となるとまったく消えていくこととなるが、筆者はその説こそが正しい解釈であり、現代語訳に反映されなければならないと考える。今回はその箇所を改めて検証して、どちらの見解が妥当であるのか再評価を行いたい。

二、互いに報復しあう説（仕返し説）

以下では、まず二説あるうちの「来世で互いに報復しあう説（仕返し説）」についてその根拠とその説の前提となる類似的思想について考察していく。まず「第一惡」とは別の箇所⁽⁴⁾に、三毒五惡段では二箇所「来世での報復説」というものが存在するため、それを確認していく。

二一、三毒段（瞋恚）の解釈

以下では、『大阿弥陀経』『平等覚経』と『無量寿経』を横に並べて引用し、その増減の具合がわかるようにした。⁽⁴⁾
『大阿弥陀経』は無量寿経類の現存最古の翻訳であり、『平等覚経』は第二番目の翻訳である。また、『大阿弥陀経』『平等覚経』を土台として、『無量寿経』が作成されているという意味でも、『大阿弥陀経』『平等覚経』を載せた。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

『大』 或儻心諍、有所悲怒、今世恨意、微相嫉憎、後世轉劇、致成大怨。⁽⁷⁾
『平』 或儻心爭、有所悲怒。今世恨意、微相嫉憎、後世轉劇、至成大怨。
『無』 或時心諍、有所悲怒、今世恨意、微相憎嫉、後世轉劇、至成大怨。

所以者何？如今 之事、更欲相 害。

所以者何？ 今世之事、更欲相患害。

所以者何？ 世間之事、更 相患害

雖不臨時應急相破、然之愁毒、 結憤精神、自然剋識、不得相離。

雖不臨時應急相破、殺之愁毒 結憤精神、自然剋識、不得相離。

雖不即時應急相破、然含 毒畜怒結憤精神、自然剋識、不得相離。

皆當對相生值、更相報復。

皆當對相生值、更相報復。

皆當對 生 更相報復。

人在世間愛欲之中、獨往獨來獨死獨生、當行至苦樂之處、身自當之、無有代者。
人在世間愛欲之中、獨來獨去死生、當行至趣苦樂之處、身自當之、無有代者。
人在世間愛欲之中、獨生獨死獨去獨來、當行至趣苦樂之地、身自當之、無有代者。

善惡變化、殃咎惡處宿豫嚴待、當獨升入遠到他處、莫能見。

善惡變化、殃咎異處宿豫嚴待、當獨昇入遠到他處、莫能見者。

善惡變化、殃福異處宿豫嚴待、當獨趣入遠到他處、莫能見者。

去在何所、善惡自然追逐行生、窈窈冥冥、別離久長。

去在何所、善惡自然追逐往生、窈窈冥冥、別離久長。

善惡自然追行所生、窈窈冥冥、別離久長。

道路不同、會見無期、甚難得復相值。⁽⁸⁾

道路不同、會見無期、甚難甚難復得相值。⁽⁹⁾

道路不同、會見無期、甚難甚難復得相值。⁽¹⁰⁾

次に、これらの箇所のうち『無量寿經』の既存の現代語訳を載せる。⁽¹¹⁾

《大乘仏典6 浄土三部經 中央公論 一〇四頁》

憤怒の情を心中に凝結させ、自然に心の内に刻みこんで忘れず、そこから離れることができないからだ。双方ともに生まれかわって対面し、互いに報復しあうことになるだろう。人は世間の愛欲のうちにあって、ひとり生まれて、ひとり死し、ひとり去っていき、ひとりやってくるものだ。苦楽のいずれかの地に向かつていくにあたっては、自分自身でこれにあたるほかはなく、代わってくれるものはだれもない。

その他の翻訳も基本的に同じ解釈を行っている¹²。

「皆當對生、更相報復」の部分は、解釈が難しい。ここに挙げた諸訳は全て「二人の人間がともに（同じ世界に）生まれ変わって報復しあう」という考え方として理解している。「報復」に対しては、諸訳は現代語でいう「仕返しする」という理解をしている。このような考え方が本来の業思想にあつたのかどうかは分らないが、もしそうだとすると、瞋恚の苦しみが未来世においても次の輪廻にわたって経験されるように表現されていることになる。また二人の人間が同一処に輪廻することになる。これらの考え方は『大阿弥陀經』に特徴的な考え方であるということが出来る。直後に「人在世間愛欲之中、獨生獨死獨去獨來」という部分があり、「ひとりで生まれる」とあるため、思想的整合性にはやや問題が残るだろう。

「二人の人間がともに生まれ変わって報復しあう」という思想は業の言説としてはあまり見られない不思議な考え方であるが、文脈上、確かにそのような意味でとることが妥当であるように考えられる。次に見ていくように「第五惡の直後」の箇所類似の思想が見られることも、この解釈を補強すると思われる。

二二、「第五惡の直後」の解釈

次に、もう一つの「来世での報復」説が見られる「第五惡」の直後の部分について確認する。それは五惡段の

「第五惡」が終わり、いわばまとめを行う箇所最初の部分にあたる。ここでは「第五惡の直後」という表現で示していく。⁽¹³⁾

『大』 或其今世、先被病殃、死生不得、示衆見之。

『平』 或其今世、先被病殃、死生不得、示衆見之。

『無』 罪惡所招 示衆見之。

壽終、趣入至極大苦、愁憂、酷毒、自相焦然、轉相燒滅。

壽終、趣入至極大苦、愁痛、酷毒、自相焦然、轉相燒滅。

身死、隨行入三惡道。苦毒無量、自相焦然。

至其然後、共作怨家、更相傷殺。 從小微起、至大困劇。⁽¹⁴⁾

至其 後、共作怨家、更相傷殺。 從小微起、至大困劇。⁽¹⁵⁾

至其久後、共作怨結、 從小微起、遂成大惡。⁽¹⁶⁾

《大乘仏典6 淨土三部經 中央公論 一五七頁》

罪惡の招いた結果を人びとに見せつけることもある。やがて、その身が死ぬと、その行いに応じて、地獄・餓鬼・畜生の三惡道にはいつていく。そこでの苦しみは限りなく、われとわが身を焼きこがす思いをするのであ

る。(たとえ現世で悪病にとりつかれなくても、) 久しいのちには、(怨敵をつくるようになり、) 互いに怨恨の念が心に結ばれ、ささいなことがきっかけとなり、ついには重大な罪を犯すことになる。

その他の翻訳も基本的に同じ翻訳を行っている⁽¹⁷⁾。

二二三、まとめ

この二カ所の当該箇所周辺には類似の言説が存在する。三毒段(瞋恚)では「今世恨意、微相憎嫉、後世轉劇、至成大怨」とあり、五惡段直後では「從小微起、遂成大惡」とある。両者はともに「小さな怨みが、ついには大きいものへととなっていく」という考え方であり、その言説とともに「三毒段(瞋恚)」と「第五惡の直後の箇所」と共通して「来世に二人が生まれて報復する」という思想がある。そのため、この二カ所は類似しており、かつ「来世で報復している」という考え方が記述されていると考えられる。二人の人間(両数)が主語になっている。

これらをまとめて図示すると以下のようになる。以上の二つが『無量寿經』で見られる「来世での報復説」である(『大阿弥陀經』『平等覺經』でも同じである)。この部分に対して管見の限りでは解釈の対立はない。

場所	描写
三毒段(瞋恚)	小さな怒りもやがて大きくなっていく。 双方が生まれ変わって、次の生で報復しあう。
第五惡の直後	互いに憎みあつて小さな悪から始まり大きな悪を犯すようになる。

三、惡業が報いる説（報応説）

一方で、三毒五惡段には、来世での果報に関して「惡業が次の世で報いる」という考え方が見られる。その代表的な箇所は「第四惡」がある。

三一、「第四惡」の解釈

『大』 今世作惡、盡傷諸善、日去見惡追之。身獨空立、無所復依、受重殃譴。
『平』 今世作惡、福德盡傷、諸善鬼神各去離之。身獨空立、無所復依、受重殃譴。
『寿』 今世爲惡、福德盡滅、諸善神鬼各去離之。身獨空立、無所復依。

壽命終身、	衆惡繞歸、	自然追促、	當往追逐、	不得止息。	自然衆惡、	共趣頓乏。
壽命終身、	惡繞歸、	自然追促、	當往追逐、	不得止息。	自然衆惡、	共趣頓乏。
壽命終盡、	諸惡所歸、	自然追促、				共趣奪之。

有其名籍	在神明所、	殃咎引牽、	當值相得。	自然趣向、	受過譴罰。
其有名籍	在神明所、	殃咎引牽、	當值相得。	當往趣向、	受過譴罰。
又其名籍記在神明、	殃咎牽引、			當往趣向。	

身心摧碎、神形苦極、不得離却。但得前行、入其火鑊。⁽¹⁸⁾

身心摧碎、神形苦極、不得離却。但得前行、入於火鑊。⁽¹⁹⁾

罪報自然、無從捨離。但得前行、入於火鑊。⁽²⁰⁾

以下では、この部分の『無量寿經』に対する現代語訳を示す。

《浄土三部經〈文庫版〉本願寺出版社 二一九頁》

この世で悪を犯して功德が尽きてしまえば、多くの善鬼神に見放され、ひとりきりとなり、もはや何一つ頼るものがなくなってしまう。そうして寿命が尽きると、これまでに犯したさまざまな悪がおのずからその身に集まってきて、その人とともに次の世に至る。また天の神がその行いをすべて記録しているから、その罪に引かれて行くべきところへ行くのである。罪の報いは必然の道理で、決して逃れることができない。

その他の翻訳も基本的に同じ翻訳を行っている⁽²¹⁾。

ここで特に問題となるのは、「諸惡所歸、自然迫促、共趣奪之」の箇所である。この部分を『浄土三部經〈文庫版〉』訳では「これまでに犯したさまざまな悪がおのずからその身に集まってきて、その人とともに次の世に至る」とし、浄土宗総合研究所編の訳では「当然〔悪行はその者を〕押し流し、一緒に〔悪しき世界へと〕至る」とするともに「悪が人についてきて次の世まで一緒に行く」という考え方を述べていると思われる。

三二、その他の説

また、この「悪業が人を追いかける」という考え方は、三毒五惡段において実は様々な表現によって説かれる。

具体的には、動詞「追」「追逐」「歸」「隨」「報」などを挙げることができる。「まず『無量寿經』「第二惡」には、

善惡過福追命所生、或在樂處、或入毒苦⁽²²⁾。

善惡の咎や福徳が命が生まれるところについてまわり、あるときは樂處に生まれ、あるときはつらい苦しみの處に入る。

と描写されている。ここでは「追」という語が使われている。また、同じく「追」に関して「三毒段（瞋恚）」

（『大阿弥陀經』）には

善惡自然追逐行生⁽²³⁾

とある。ここでは「追逐」（追いかける）と表現されている。「追」以外の表現としては、「歸（ついてくる）」というものもある。先ほど挙げた「第四惡」には

壽命終盡、諸惡所歸、自然迫促、共趣頓之⁽²⁴⁾、

と、「歸」という表現が行われている。ここでは「歸」は「ついてくる」という意味であり、「諸惡が歸する（ついてくる）」という意味となっている。また同趣旨のことが「隨（與）」という表現でも説かれる。「三毒段（愚癡）」には

自然非惡、先隨與之、恣聽所爲、待其罪極⁽²⁵⁾。

などの使われ方がされている。

またこれらと同様の表現に「報」がある。「第五惡」には

善惡報應、禍福相承、身自當之、無誰代者⁽²⁶⁾。

善惡は報い、禍福は次々と伝わっていく。自分でその結果は受けるものであり、誰も代わってくれない。

とある。「報應して（報いて）」となっている。全体では「悪業が人を追いかける」という考え方が説かれている。一人で次の世にいくのであるが、そのときに三世をこえて悪業が影響する場合は、報いる、ついていく、追いかけていく、というような表現になると考えられる。その場合、実際に本文に出る漢字としては「報」をはじめ、「追」「追逐」「歸」「隨」などがあつた。これらは表現としては異なるが、意味としては同じく「悪業が人を追いかける（ついていく）」という考え方となっている。

三二、まとめ

これらの用例から、「善惡の禍福が追う（次世まで追う）」ことは、むしろこの三毒五惡段ではくり返し述べられる中心的な考え方であると考えることができるといえる。以下ではこの状況を少しまとめて表にした。

場所	描写
三毒段（瞋恚）	善惡は自然に（次に）生じるところを追っていく。
三毒段（愚癡）	非や惡は必然的にこれ（その人）についていく。 ⁽²⁷⁾
第二惡	善惡の咎や福徳が命の生まれるところについてまわる。
第四惡	惡業の報いがその人に集まり、一緒に次の世にいく。
第五惡	善惡は報い、過福は次々と伝わっていく。

三毒五惡段では、様々な惡業とその結果が述べられるが、以上確認してきたように、惡業の結果が來世にもたらす影響として、（少なくとも）二種類の考え方が見られる。一つは「次の輪廻にわたって（二人の人間が）報復しあう」という考え方であり、もう一つは「業報が行者を追いかける（そして次の生にも影響を与える）」という考え方である。前者のほうは二カ所に説かれる。一方で後者のほうは様々に説かれ、三毒五惡段の基調となる考え方となっている。⁽²⁸⁾

またこの相違は別の視点から眺めていくと、一人の人間の輪廻の話をしているのか、二人の人間による同時的な輪廻の話をしているのかということに言い換えることができる。

本論文は、この「第四惡」の今提示した両現代語訳で展開されているような解釈・思想、すなわち「惡業がその人とともに次の世に至る」でもって、次に見られる「第一惡」の部分も翻訳すべきであるというのが主旨である。それでは具体的に検証していく。

四、「第一惡」の解釈

以上では「來世にわたって報復しあう関係」と「來世に業が影響する」という考え方を見てきた。これらは似ているようで異なる考え方である。筆者が問題にしたいのは、以下の「第一惡」の部分である。「第一惡」は、五惡段で説かれる五惡のなかの第一番目の部分を指して言われる。

四一、本文

『大』 轉貿身形、改惡易道。 壽命 短長。

『平』 屬貿身形、改惡易道。 壽命 短長。

『無』 轉貿其身、改形易道。 所受壽命或長或短。

魂神 精識自然入趣、受形寄胎。 當獨值向、相從共生、轉相報償、當相還復。

魂神命精 自然入趣、受形寄胎。 當獨值向、相從共生、轉相報償、當相還復。

魂神 精識自然趣之。 當獨值向、相從共生、更相報復、無有止已、⁽²⁹⁾

殃惡禍罰、衆事未盡、終不得離。

殃惡譴罰、衆事未盡、終不得離。

殃惡 未盡、不得相離、

展轉其中、世世累劫、無有出期、難得解脫、痛不可言。⁽³⁰⁾

展轉其中、世世累劫、無有出期、難得解脫、痛不可言。⁽³¹⁾

展轉其中、無有出期、難得解脫、痛不可言。⁽³²⁾

この「第一惡」の箇所は、『大阿弥陀經』『平等覺經』から『無量壽經』への修訂の度合いは大きくなく、また大幅

な削除・追加の箇所もない。意味も細部では異なるところもあるが、全体的にはほぼ同趣旨のものと判断できる。

四二、既存の解釈

中国、朝鮮、日本の注釈書は（ここに対する注釈が存在するものは）⁽³³⁾おしなべて「仕返し説」で解釈している。例えば、法海の『大無量寿経辛卯録』には

當獨値向相從共生。この三惡道へ趣くときは誰も伴ふものなし。ただ獨り趣かねばならぬ。されども此世に於て相手となり敵となりたるものは互いの業力にて未來迄同じ處に一所に生れることなり。更相報復。未來までも同處に互に妬をむくいかへすことなり。⁽³⁴⁾

とあり、「互いの業力で同じ處に生まれ報復する」としている。また、深励の『無量寿経講義』では、

當獨値向。三途へ趣くときは誰れ伴ふものはない獨なり。現生に於ての相手敵は同じ處に生れるなり。相從共生。かたき同士が同じやうに生ずるなり。更相報復。互ひにあだを報ずるなり。（中略）無有止已。此世のかたきをとれば未來で取られる。世世に止むことなし。⁽³⁵⁾

とあり、「敵同士が同じところに生ずる」として「仕返し説」で解釈している。

この部分の『無量寿経』に対する諸現代語訳は、以下のようになっている。

《大乘仏典 6 浄土三部経 中央公論 一二九頁》

次から次へと姿を変え、形を改めて、次の世界へと移り変わっていく。その身のうける寿命は、あるときは長く、あるときは短いが、魂やそのはたらきも、必ずその身を離れずにつきまとうのである。本来なら、ただひとりで直

行すべきはずなのに、(前世の怨敵が)あとを追って一緒に生まれ、互いに報復をしあつて、いつ果てることもないありさまとなる。悪行に対する懲罰が終わらないうちは、怨敵と離れることができないのである。このような苦しみのなかを転々として移りまわりながら、…

《浄土三部経〈文庫版〉本願寺出版社 二〇三頁》

次々とその身を変え姿を変えて苦しみの世界をめぐり、長短の寿命を受けるのであつて、そのころはおのずから行くべきところに行くのである。そしてたとえひとりで行つても、前世に憎みあつたもの同士は同じところに生まれあわせ、かわるがわる報復しあつて尽きることがなく、犯した罪が消えない限り、互いに離れることができない。こうして地獄や餓鬼や畜生の世界を転々と…

《浄土三部経―現代語訳 浄土宗総合研究所 一四三頁》

その身を転じて姿も住む世界も取り替える。具わつた寿命はあるいは長く、あるいは短い。(いづれにせよ、その)魂はこうした「悪しき世界」に赴くのだ。「それぞれは」独りで「そこに」向かつていくものであるが、「そういう者たちは同じように」みな次々と「そこに」生まれるのだ。「そして」互いにやり合つては、いつまでも尽きることがない。罪深い悪行が尽き果てないのであれば、互いに離れ去ることなどできはしない。「そうしているうちに悪しき世界に」何度もうまれ変わり、…

このように、現代語訳も含めほぼすべての注釈書はここを「仕返し説」で理解している。⁽³⁶⁾ おそらく前掲の「三毒

段（瞋恚）」と「第五惡の直後」の二カ所があつたからこそ、ここに対する「仕返し説」の解釈が後押しされたと思われる。

四二三 問題点

「第一惡」の傍線部「當獨値向、相從共生、更相報復、無有止已、殃惡未盡、不得相離」では、『大阿弥陀經』『平等覺經』が「報償」としてるところを、『無量壽經』では「報復」としてゐる。三つの現代語訳がともに、ここを「（怨敵同士が）互いに報復しあう」という先ほどの「三毒段（瞋恚）」と「第五惡の直後」と同じ意味（＝仕返し型）で理解してゐる。たしかに、「三毒段（瞋恚）」の箇所と同じように「報復」という熟語を使用しているが、本当に意味としても同じなのだろうか。その場合、この箇所の「報復（『大阿弥陀經』『平等覺經』は報償）」とそれに続く「還復」（『大阿弥陀經』『平等覺經』）をどのような意味として理解すればいいのだろうか。

また、別の角度から見ると、ここでの問題は「共生」（共に生まれる）とは、何が共に生まれるのかという問題となるだろう。はたしてこの「共生」は「二人の敵対する人間が一緒に生まれる」ことを意味するのだろうか。

また、さらには「不得相離」は何が離れないのか（はたして怨敵と離れないことを言っているのだろうか）ということも争点となる。

これらの問題を二説を挙げることで指摘してゐるのが、冒頭にもあげた炬範の『無量壽經略箋』である。炬範は以下のように解釈してゐる。

當獨値向者、自業自得無^ル有^ル代者。獨自値向^ニ其處^ニ也。相從共生者、唯有^ニ惡業^ニ相從共生^ニ彼苦處^ニ。故有^ニ獄中羅刹苦具等^ニ。…（一）

或云、今世所殺之者相從、後生ニ共生ニ一處ニ報レ怨。獨有ニ能殺之人ニ値ニ向ニ其怨ニ而非餘。故言ニ當獨値向等。…
(二)³⁷⁾

ここではまず「悪業がついてきて（報いて）悪業と一緒に苦しいところに生まれる」という「報いる説」（一）をあげ、第二義として、「或いは云く」として「仕返し説」（二）を出している。同一の本文から、大きく異なる二つの解釈が生まれている。

四四 拙訳

また、続いて「第一悪」の拙訳を示す。

《『大阿弥陀経』第一悪の拙訳》

次々と姿・形をかえて、悪（道）を改めて（経験し）、道（趣）をかえる。寿命は短い。

心は自然に境界に入り、形を受け受胎する。ただひとりで向かつていくのであるが、（業の果が）ともについてきて、へめぐって報い、またそこで影響を及ぼす（ついてくる）。悪による罰は多くはいまだにつきず、ずっと離れない。かわるがわるついてまわって、世々に劫を重ねるが、出離することができず、解放されることがむずかしく、そのつらさは言うことができない。³⁸⁾

《『無量寿経』第一悪の拙訳》

次々と身をかえて、姿形をかえ、道（趣）をかえる。（そこで）受ける寿命は、長いときもあり短いときもある。

心は自然にそこに行く。たつたひとりでそこへ向かつていくのであるが、(業の果がついてきて)それとともに生じ、つぎつぎと(前世の行いの果)が報いてきて、それが絶えることがない。惡(の咎)はいまだにつきず、離れることができない。(そうやって)そのなかを転々としていき、出離するときはまったく訪れず、解放されることがむずかしく、そのつらさは言うことができない。

四一五、語義解釈の相違点

「第一惡」の当該箇所は、以下に示す四点が連続してどちらともとれる意味となっている。その偶然が重なったため、二説が生まれることとなったと考えられる。

四一五、一、語義解釈の相違点①「共生」

傍線部の「共生」に対して「敵対する二人が一緒に生まれる」のではなく、筆者は「惡業(の咎)が(ついてきて)ともに生まれていく」という意味であると判断した。

もしこの「惡業(の咎)」が(ついてきて)ともに生まれていく」という解釈が許されるならば、次に続く「殃惡未盡、不得相離」との意味の連携もよくなり、「第一惡」のこの周辺の文章全体を通じて一人の人間の惡業の来世への影響を話題にしていることとなり、意味も統一的なものとなる。

四一五、二、語義解釈の相違点②「當獨値向」

また、「當獨値向」の意味あいもかわってくる。諸現代語訳にあるように「本来ならただひとりで向かつて行く

はずなのに、(前世の怨敵が)あとを追って一緒に生まれ」という解釈は、よく考えるとその前半の譲歩部分は必要な文言である。ここは「一人の人間(ともう一人の人間)」との関係で「独り」としたとも考えられるが、「一人の人間(とその人のつくつてきた業咎)」という関係で「独り」と言っているとも解釈できる。後者のアイデアの場合、「たったひとりでそこへ向かっていくのであるが、(業の果がついてきて)それとともに生じ、つぎつぎと(前世の行い)が報いてきて」となり、「當獨值向」の文言も必要不可欠なものとなる。

四五三、語義解釈の相違点③「殃惡未盡、不得相離」

「殃惡未盡、不得相離」の箇所も、「(犯した罪が消えないため)敵対する二人がなかなか離れられない」のではなく、その直前の語から関係させて解釈し、「過去に犯した」悪の咎がまだなくならず、(その悪が)なかなかはなれない」という意味であると筆者は理解する。つまり「殃惡」という語が「不得相離」の主語になっていると判断する。ここでは三世にわたって業が影響を及ぼすという仏教の考え方が述べられている。

またこのうちの「不得相離」の部分は『大阿弥陀經』『平等覺經』では、「終不得離」となっており、諸現代語訳が「互いに」と翻訳する根拠としている「相」の字も存在しない。そのため「二人が互いに離れられない」という諸訳の説は、『大阿弥陀經』『平等覺經』の対応箇所からは支持されないことになる。また、そもそも、『大阿弥陀經』『平等覺經』には、「殃惡禍(譴)罰、衆事未盡、終不得離」となっており、それを参考にすれば「悪による罰は多くは未だにつきず、ずっと離れない。」という意味以外に多様な解釈を挟む余地はない。⁴⁰⁾

ちなみに、この「不得相離」⁴¹⁾と全く同じ四字は先ほどの三毒段の引用でも確認される。

然含毒畜怒結憤精神、自然剋識、不得相離。⁴²⁾

そこでは同じ「不得相離」という語に対して三つの現代語訳は揃って「憤り（という惡の思い）からはなれることができない」と解釈している。そこでは上に出てきたものを主語に採用して「それが離れない」としている点で、「第一惡」を「惡はいまだにつきず、離れることができない」と解釈した場合と同じ方向性をもつ翻訳を行っており、「怨敵と離れられない」とはしていない。

また「不得相離」に近い語形である「不得離却」という語句が先述した『大阿弥陀經』『平等覺經』『第四惡』にも見られる。再度引用する。

『大』 身心摧碎、神形苦極、不得離却。

『平』 身心摧碎、神形苦極、不得離却。

『無』 罪報自然、無從捨離。

ここに対する三つの現代語訳（『無量壽經』であるが）は先述したように「罪の報いは必然であつて、離れていくてくれない。」（罪報自然、無從捨離）と編輯している。⁽⁴³⁾ ここでは、明らかに「罪の報いが離れられない」という理解を示しており、「怨敵と離れられない」とはしていない。

さらに「第五惡」にも

應其所行、殃咎追命、無得縱捨⁽⁴⁴⁾。

とあり、「不得相離」と類似した「無得縱捨」という語がある。ここでも諸現代語訳は「咎が追いかけてきて、（行者は）その咎を捨てることができない」という意味で理解している。これなどは文章全体が今回の「第一惡」を「惡業が報いる」ととつた場合と全く同じ意味の流れとなっている。

もしこの「第一惡」の「不得相離」だけを（怨敵と）離れられない」と翻訳した場合、その訳は三毒五惡段の

中で、孤立した解釈となつてしまい、解釈者の恣意性が入った可能性が出てくる。全体の統一性を考えるならば、「第一惡」の「不得相離」は「過去に犯した」惡の咎が、なかなかはなれない」と解釈するほうが穩当である。

結局、「離れられない（不得相離）」ということは、別の角度から言えば次に見るように「（必ず）報いる＝報復」「ついてくる」ことであり、この「第一惡」の「當獨値向、相從共生、更相報復、無有止已、殃惡未盡、不得相離」という一連の文は、同一のことを違う角度から二度くり返し述べている（たたみかけている）と理解することができる。

四一五・四、語義解釈の相違点④「報復」「報償」「還復」

次に、今回の「第一惡」で最も重要なポイントとなるところの「報復」「報償」「還復」という熟語について見ていく。再度引用する。

『大』 當獨値向、相從共生、轉相報償、當相還復。

『平』 當獨値向、相從共生、轉相報償、當相還復。

『無』 當獨値向、相從共生、更相報復、無有止已、

今回の箇所は『大阿弥陀經』『平等覺經』『無量壽經』間での変更は大きくないため、『無量壽經』にある「報復」の語は、『大阿弥陀經』『平等覺經』の「報償」と同じ意味合いとして使われるような意味で使用であることが本来望ましい。⁽⁴⁵⁾ところで『大阿弥陀經』『平等覺經』にある「報償」は（後に見るように）無量の壽經類では「報いる」の意味での使用のみであり、その状況を考慮するならば、この「第一惡」で「仕返し」という意味で使用したとは考えにくい。また「三毒段（瞋恚）」や「第五惡の直後の箇所」のように「小微より、大劇苦にいたる」というよ

うな表現が「第一惡」のこの部分の周辺にないことも「仕返し」ととるべきでない理由としてあげることができる。また『大阿弥陀經』『平等覺經』では、この対応箇所は「當獨值向、相從共生、轉相報償、當相還復。」となっている。ここでは「當相還復」という語が加わっており、対句的な形で強調した形となっているが、ここに出てくる「還復」には「報復する」という意味での使用例はない。筆者はこの「還復」も「かえってくる」報いる」という意味を示し、「(怨敵が)報復する」という意味ではないと考える。

四・五・四一、「報復」「報償」「還復」の使用例

次に「報復」「報償」の語の解釈の妥当性（「報いる」の意味での使用が、当時はたしてあったのかどうか）を検証していく。まず無量寿經類での使用例、次に仏典での使用例、そして、同時代の外典での使用例を見ていく。

四・五・四二、無量寿經類での用例

『大阿弥陀經』『平等覺經』『無量寿經』にみられる「報復」「報償」「還復」の語の他の使用例を見ていく。まず、「報償」の語は『無量寿經』『第五惡』にみられる。

父母教誨、瞋目怒應。言令不和、違戾反逆、不如無子。取與無節、衆共患厭。負恩違義、無有報償之心。貧窮困乏、不能復得。辜較縱奪、放恣遊散。⁴⁶

ここでは、「報償」は「(恩義に)報いる」という意味で使用されている。

また、『大阿弥陀經』の上巻の箇所では、

不信施貸後得報償、復不信作善後世當得其福⁴⁷

とある。ここでは「施貸したことが、後に報う（かえってくる）」という意味で使われている。これらの用例から考えても、「第一惡」の当該箇所（報償／報復）もこのように「報いる」と解釈したほうが自然である。

また先述したが、『無量寿經』では「第五惡の直後」に「報應」という語も見られる。

善惡報應、禍福相承、身自當之、無誰代者。⁽⁴⁸⁾

そこでは、善惡の禍福が報いて（報應）受け継いでいく（＝ついでいく）ことが説かれており、「相承（受けついでいく）」と言ひ換えられている。

また「還復」については、『無量寿經』に

欲令至願、水即至願。欲令灌身、自然灌身。欲令還復、水輒還復。⁽⁴⁹⁾

とあるのをはじめとして『大阿弥陀經』『平等覺經』『無量寿經』では合計十例あるが、すべて「もとに戻る」という意味である。問題の「第一惡」での用例でもおそらく「（本人の）もとに（咎が）かえる」という意味であると考えられる。少なくとも「仕返しする」という意味よりは、「報いる」という意味に近い用例といえることができる。このように「報償」「報復」「還復」を「過去に行ったことが報いる」という意味で理解することは無量寿經類ではあり得ることであり、実際は多くの用例がむしろこちらの意味で使用されている。

四一五―四一三、無量寿經類以外の仏典の用例

仏教内の他經典での使用を見ると、たとえば失訳『佛説鬼子母經』では、

「願佛哀我。我欲止佛精舍傍。我欲呼千子王。我欲使與佛結要。我欲報復天上天下人恩。」⁽⁵¹⁾
佛言「善哉、如汝有是意大善」。

とあり、ここでは「(恩に) 報いる」という意味で「報復」の語が使用されている。

四一五四四、仏典以外の用例

仏典以外では、まず「報復」には

諸嘗有恩者、皆報復焉。(『漢書』朱買臣伝)

とあり、「恩に報いる」という意味での使用が見られる。また、

一 飡之德、睚眦之怨、無不報復。(『三国志』蜀志、法正伝)

とあり、「徳」や「怨」が「報いないことはない」というように、「影響が出る」という意味で使用されている。

また、「報復」という熟語の一部を形成している「復」という漢字一字でも

以復天子厚恩(『漢書』匈奴伝)

とあるなど、「(天子の厚恩に) むくいる」という意味での使用があることが確認される。このように、「恩」や「徳」や「怨」が報いることは、三毒五惡段でくり返し説かれる考え方と同じである。

一方で、「報復」を「仕返しをする」という意味で使用する例も同時期には確かに存在していたが、とりあえず「報いる」という意味で使用する例が同時代の仏教内外のテキストに存在するということを確認した。

「第一惡」の当該箇所は「三毒段」「五惡段の直後」の箇所の側のものとしても一応理解できるし、「第四惡」をはじめとしてくり返し述べられる「惡業が次の世で報いる」側の意味としても理解できる文言の並びをもった箇所である。実に両方の考え方としても読める文言の並びであるにもかかわらず、既存の注釈では、一貫して「仕返し説」として理解されてきた。しかし、周辺の様々な状況(「共生」、「當獨値向」、「殃惡未盡、不得相離」、「報復」の

四つの相違点」と、先行する『大阿弥陀経』『平等覚経』の伝統を考慮に入れると、「第四悪」のような「悪業が次の世で報いる」という側で理解するほうが妥当性が高いと考えられる。⁽⁵³⁾ 諸現代語訳は、少し強引に「仕返し説」の方向へ結びつけて翻訳をしてしまったと筆者は考えている。

「第一悪」のこの箇所を「悪業が次の世で報いる」という意味で理解することは、少なくとも『大阿弥陀経』『平等覚経』では当てはまると筆者は考える。そして、おそらく『無量寿経』においても⁽⁵⁴⁾ 言えるのではないかと思われる。

四一六、文脈からの検討

今回の「第一悪」では、この箇所にいたるまで「悪によって次生に苦悩を受ける」という話をくり返し行っていた。その流れのなかで「仕返し」という意味の「報復」がテーマになることは、文脈的に唐突であり、不自然な印象を与える。おそらくここでは直前の「三毒段（瞋恚）」に出る「仕返し説」と同じ組合せの熟語（報復）⁽⁵⁵⁾ に引きずられたため、諸現代語訳は「仕返し」の意味である「報復」という語であると考えたと思われる。そして、「報復」という単語に対して「仕返しの意味の報復である」という理解が⁽⁵⁶⁾ まずあつて、そこからその「仕返し」という意味に辻褄が合うように、周辺の翻訳を調整していったように見受けられる。（この周辺はたまたま様々に読むことができるような語の配列を持っていたと思われる。）一方で、ここを「報いる説」として考えた場合、「悪によって次生に苦悩を受ける」という流れに添い、文脈的に自然なものとなる。

五、まとめ

三毒五惡段では、様々な惡業とその結果が述べられる。そのうち惡業の結果が来世にもたらす影響として、（少なくとも）二種類の考え方が見られる。一つは「次の輪廻にわたって報復しあう」という考え方であり、もう一つは「業報が行者を追いかける（そして次の生にも影響を与える）」という考え方である。⁽⁵⁷⁾そして「第一惡」の部分は、ある偶然（「報復」という語のもつ二義性）が重なり、諸現代語訳で行われているような「次の輪廻にわたって報復しあう」という方向性の翻訳が、長い間説得力を持つて伝承されてきた。それに対して、諸現代語訳とは異なり、「業がその人についてきて報いる」（炬範『略箋』の第一義…唯有「惡業」相從共生「彼苦處」）という意味で理解すべきであるというのが筆者の主張である。その根拠はまとめると以下のことであつた。

・「仕返し説」は「第一惡」の前後の文脈からは唐突で不自然である。

・「第一惡」では他の二箇所と異なり「小微より大劇にいたる」などの言説と一緒に説かれていない。

・対応する『大阿弥陀經』『平等覺經』を「仕返し説」で翻訳することができない。

これらの状況をふまえると、「報復」を「仕返し」ではなく「報いる」という意味で理解する選択がよりよい。業（惡業）が次の世界に影響を現したという意味で「報復」（報、復、報償、還復）という語を使用していたと考えられる。実際に三毒五惡段で説かれていた業報のイメージは「惡業」というものが物質のように人についていく」というように、当時の他界観が素朴に表現された箇所であると思われる。こちらのほうの業の考え方がむしろ三毒五惡段において何度も繰り返し語られた業の考え方である。

炬範の『無量寿経略箋』で提示された第一説（業報が行者を追いかける）は、現代では全く顧みられなくなった

が、むしろそちらの説が再評価されていくべきであると筆者は考える。

『無量寿経』の現代語訳において不明な点、不備のある点は、『大阿弥陀経』『平等覚経』を参照すると、その一番穏当な解釈が見えてくることが多い。なかでも三毒五悪段は、特に難解な漢字が並んでおり、未だ十分に説明されているとは言えない。辛嶋氏の『大阿弥陀経』⁽⁸⁾「訳注」研究をはじめ、より活発な議論が行われ、『大阿弥陀経』『平等覚経』『無量寿経』のそれぞれの説明が進むことが待たれる。

略号

『大正蔵』…『大正新修大蔵経』
『浄真全』…『浄土真宗聖典全書』

註

- (1) たとえば輪廻を説く場合でも、三悪道だけを輪廻すると考えているようにうかがえるなど、いくつかの特異性がある。
- (2) 『大阿弥陀経』『平等覚経』の「第一悪」についても同様である。
- (3) 『大正蔵』一、二七六上七、『浄真全』I、五七・八。
- (4) 基本的には、高麗版を基準とした。異本に重要な情報があると判断した場合は、適宜注で示す。
- (5) 辛嶋静志「初期漢訳仏典の原語の研究」、『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』（佼成出版社、二〇一四）、八九四頁。『平等覚経』も同様に『大阿弥陀経』を見て作成されていると考えられる。
- (6) ここで載せる『大』は『大阿弥陀経』を、『平』は『平等覚経』を、『無』は『無量寿経』を指す。また本文は旧字体で表記し、句読点、記号、傍線は筆者が付した。時代的に前のものに比べて変化があるところは文字をゴシック体にした。
- (7) 無量寿経類の諸本対照本には香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、一九八四）、大田利生『無量寿経

漢訳五本梵本蔵訳対照」(永田文昌堂、二〇〇五)がある。三毒五惡段は特に異同が少ないため、より細かい対照本のほうが有効であると考えられる。そのため、これらの先行書を参照してより細かいものを考えた。

(8) 『大正蔵』一二、三二二上二八、『淨真全』I、一七五・一。

(9) 『大正蔵』一二、二九四上一五、『淨真全』I、二六五・三。

(10) 『大正蔵』一二、二七四下一九、『淨真全』I、五二・九。

(11) 『無量寿経』にはいくつかの現代語訳があるが、そのなかでも、ここにあげた三つが比較的新しくかつ細かく翻訳していると考えられる。語句解説や注釈もあり、参考となる点が多々あり、普及していると筆者は考える。その他、坪井俊英『浄土三部経概説』(法蔵館、一九九六)、柏原祐義『浄土三部経講義』(平楽寺書店、一九八〇)なども存在するが、ほとんど同じ説であり、煩瑣となるためここでは割愛した。

(12) 傍線部に関して、『浄土三部経・文庫版』(本願寺出版社、一七七頁)では、「後にはまたともに同じ世界に生まれ対立し、かわるがわる報復しあうことになるからである。」とし、『浄土三部経―現代語訳』(浄土宗総合研究所、一三三頁)では、「(いづれ)生まれ変わって、その相手と対面し、お互い報復し合うことになってしまうのだ」としている。また、その大もととなる『大阿弥陀経』も現代語訳が存在し、「双方、生まれ変わって出会い、互いに報復しあうはずである。」とある(辛嶋静志、『大阿弥陀経』訳注八、『仏教大学総合研究所紀要』第一四号、二〇〇七、七頁)。いずれも同様の意味となっている。

(13) 他の研究者のまとめ方としては、例えば龍口氏は「総括的に五惡について述べられる」(龍口明生「無量寿経の五惡段と在家者」『宗教研究』四四、二〇〇一、一九三頁)などとしている。

(14) 『大正蔵』一二、三一五中一〇、『淨真全』I、一八八・二。

(15) 『大正蔵』一二、二九七中一三、『淨真全』I、二七八・一四。

(16) 『大正蔵』一二、二七七中一一、『淨真全』I、六二・一四。

(17) 傍線部に関して、『浄土三部経・文庫版』(本願寺出版社、二三三頁)では、「長い時を経てふたたび人間界に生まれても、また互いに憎みあつて、小さな悪から始まり大きな悪を犯すようになる。」とし、『浄土三部経―現代語訳』(浄土宗総合研究所、一五六頁)では、「世間の人々は三惡道での苦しみ」が「久しく続いたその後でも互いに逆恨みし合う。(はじめは)他愛もないことだったのが、ついにはとんでもない惡行になる。」としている。

(18) 『大正蔵』一二、三二四下五、『淨真全』Ⅰ、一八五・三。

(19) 『大正蔵』一二、二九六下一〇、『淨真全』Ⅰ、二七六・二。

(20) 『大正蔵』一二、二七六下一六、『淨真全』Ⅰ、六〇・八。

(21) 傍線部周辺に関して、『淨土三部經—現代語訳』（淨土宗総合研究所、一五〇頁）では、「（それまでの）悪行（の報い）」が（その者の身に）寄り集まる。当然「悪行はその者を」押し流し、一緒に「悪しき世界へと」至るのである。またその者の名前が天地の神々が持つ「悪人専用の」名簿に記され、「その」罪が「その者の身を」引つ張って、「その者は」行くべきところへ行くしかない。」としている。『大乘仏典6 淨土三部經』（中央公論、一四五頁）は「犯してきた諸悪が帰着するところの報いが、必然的に迫ってきて出発をうながし、その人間を惡道に連れていつて捨ててしまう。また、その人間の惡事をのせた人名帳は、記録として神の手のもとにあり、その懲罰の規定は彼を引きよせるから、どうしても定められた惡道に向かつて行かなければならない。」とする。こちらは少し著者には意味がとりづらかった。

(22) 『大正蔵』一二、二七六中四、『淨真全』Ⅰ、五八・九。

(23) 『大正蔵』一二、三二二中八、『淨真全』Ⅰ、一七五・七。

(24) 『大正蔵』一二、二七六下一六、『淨真全』Ⅰ、六〇・八。

(25) 『大正蔵』一二、二七五上二七、『淨真全』Ⅰ、五四・五。

(26) 『大正蔵』一二、二七七上二五、『淨真全』Ⅰ、六二・四。

(27) この文章は解釈が困難であった。「自然」は全体の主語となる可能性もあると考えられる。

(28) 福永光司氏は「インドの仏教が中国に伝来した当初、伝統的な学識教養を持つこの国の支配層の人々が、その異国の宗教の教義に関して最も驚いたのは、（中略）人間存在をこの現世だけでなく前世および来世と連続的に考える「三世」の思想、ないし現世における「業」の善悪によつてその「報」としての来世の在り方（中略）が規定されると説く輪廻の思想であったという」と述べている（『中国宗教思想史』、『岩波講座中国宗教思想1』、岩波書店、一九九〇、一三〇頁）。

また同様に、森三樹三郎氏は「この時代の仏教論争を集めた『弘明集』などを見れば、いかに当時の知識人が三世報応の説に魅せられたか、そしてそれを仏教の根本義として信じていたかが、うかがわれるであろう。」と述べてい

彼我相復^レ生生展轉[、]永無^レ由得[、]斷絶^ニ也。殃惡未盡不得相離[、]者、殃惡相續[、]無^レ有[、]盡期[、]誰能得[、]離[、]之乎。」と述べている。道隱『無量寿経甄解』（『新編真宗全書』一、思文閣、一九七五、五一三頁）や『無量寿経集解』（『浄土宗全書』統一、山喜房佛書林、一九七三、四一七頁）は、この矩範の説に触れ、紹介している。

- (38) 『平等覚経』は、『大阿弥陀経』と対照すると、「精識」（『大河』）↓「命精」（『平等』）、「禍」（『大阿』）↓「謫」（『平等』）となるという二箇所の変化のみなので、現代語訳は『大阿弥陀経』に順じ、省略する。

- (39) 「相値」「値」の意味に多義的な要素があると考えられる。『大阿弥陀経』『平等覚経』『無量寿経』では、「値」を「あう」という意味で使用することもあるし、一部では「直」と同義の意味として使用することもあると考えられる（『大乘仏典 浄土三部経』一三一頁を参照）。その場合は「直向する」のような意味となる。『大阿弥陀経』『平等覚経』『無量寿経』の使用例では、「値」に対して、あきらかに「あう」の意味での使用もある。例・「今得値佛、復聞無量壽聲。」「無量寿経」（『大正蔵』一二、二七五中三、「浄真全」一、五五・六）。

- (40) もし、それでも『無量寿経』の諸現代語訳のように解釈するのであれば、少なくとも『大阿弥陀経』『平等覚経』から『無量寿経』にいたる過程で、編者が意味を変えたことを前提にしなければならない。

- (41) 『無量寿経』で出てくる「相」は「互いに」という意味であるというのが、これまでよく行われてきた理解であった。そこから「相從共生」に対して「敵対者とともに生まれる」という解釈も生まれてきた。しかし、「相」の字のいくつかには「次々と」と解釈すべきものがあり、それによつて「相」を含む箇所の現代語訳は再考が必要である。またその他「関係の中で動作が一方に向かう」ことを示す意味の「相」の使用もあり、すべての「相」を「互いに」で理解するには慎重になる必要がある。（辛嶋静志『『大阿弥陀経』訳注（3）』『佛教大学総合研究所紀要』第八号、一三五頁など参照）。

- (42) 『大正蔵』一二、二七四下二二、「浄真全」一、五二・一一。

- (43) もとの『大阿弥陀経』『平等覚経』の「不得離却」も同じ方向の意味である可能性をもつ。

- (44) 『大正蔵』一二、二七七上二六、「浄真全」一、六二・四。

- (45) 『大阿弥陀経』『平等覚経』から『無量寿経』へと受容される際に意図的に編集させた可能性ももちろんあるが、この周辺の編集の程度を考えると、おそらく『無量寿経』でも意味を変化させていないだろうと考える。

- (46) 『大正蔵』一二、二七七上二二、「浄真全」一、六一・四。

- (47) 『大正蔵』 一二、三〇四下二、『淨真全』 Ⅰ、一四二・一一。
- (48) 『大正蔵』 一二、二七七上二五、『淨真全』 Ⅰ、六二・四。
- (49) 『大正蔵』 一二、二七一中一、『淨真全』 Ⅰ、三八・六。
- (50) 問題の箇所(第一惡)の『大阿弥陀經』『平等覺經』の「還復」以外の数。
- (51) 『大正蔵』 二一、二九一中一七。傍線は筆者による。
- (52) 例えば、『無量壽經』では、先述した「三毒段(瞋恚)」「報復」であり、外典では「拘留漢使、以相報復」(『漢書』匈奴伝) など。
- (53) すなわち結果的に考えると、『無量壽經』では、同じ「報復」という漢字を使って、「三毒段(瞋恚)」と「第一惡」というやや接近する二カ所で異なる意味を表していたと考えられる。
- (54) 『平等覺經』から『無量壽經』へ展開した際に、「當相還復」を「無有止已」とした点から編集者によって意味が変化させられた可能性がわずかに残る。ただし、その場合でも「第一惡」の文脈を大きく逸脱をしていると言うことはできる。
- (55) あるいは「第五惡の直後」の部分に引きずられた形である。
- (56) 現代の感覚では「報復」は印象の強い言葉であり、通常「仕返し」と理解される。
- (57) この二つの考え方があることが、三毒五惡段を混乱させているし、何かのテキスト上の問題からこの二説が出た可能性も考えられる。
- (58) 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(一)』(九)、『仏教大学総合研究所紀要』第六―一七号(一九九九―二〇一〇)。